

# 地方創生と大学の役割

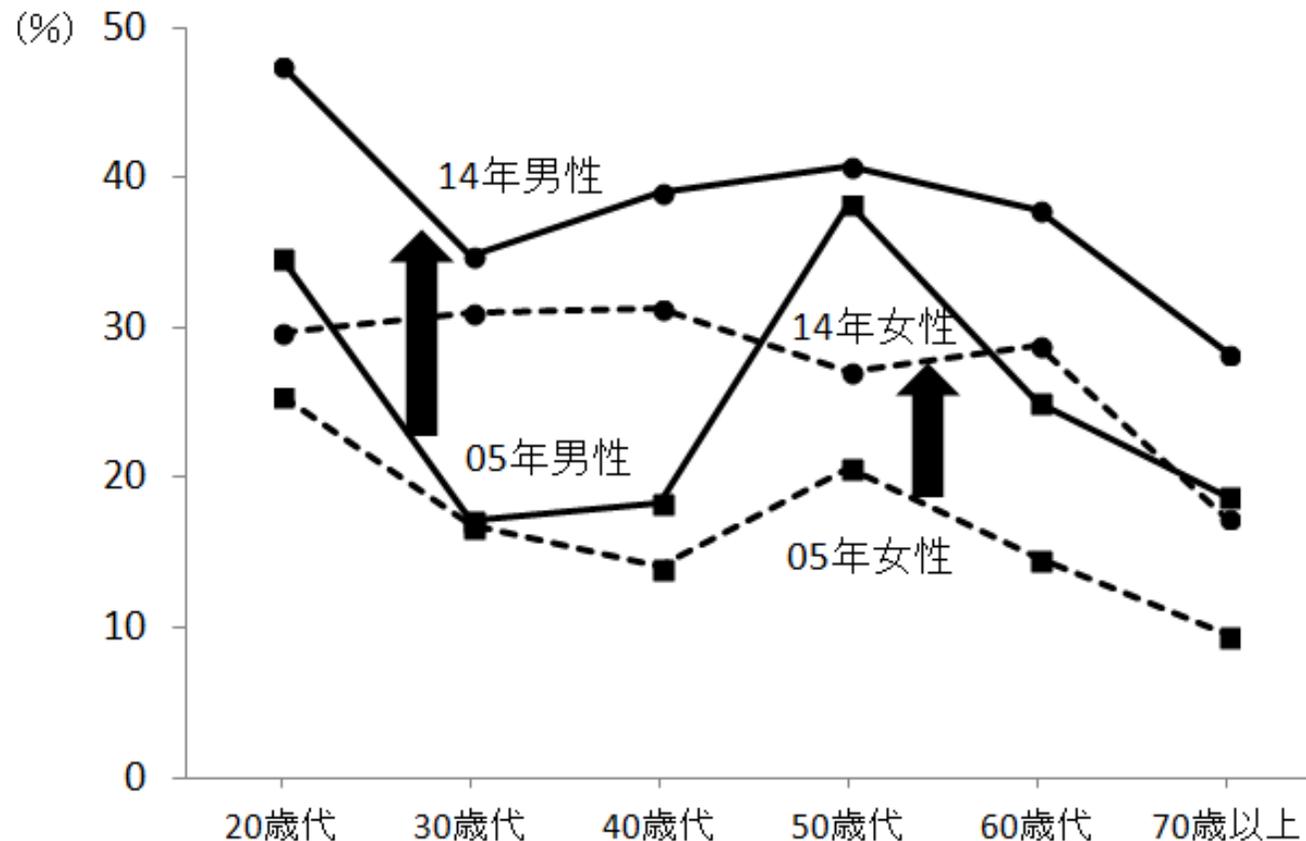
小田切 徳美(明治大学)

# I 農山村の新しい風－田園回帰－

## ■ 国民の「田園回帰」志向 ← 世論調査結果

・ 移住希望の著しい上昇（特に若者、ファミリー世代）

● 農山漁村に対する定住の願望を持つ人の割合  
（内閣府世論調査、2005年と2014年）



# I 農山村の新しい風－田園回帰－

## ■「田園回帰」の広がり

- ・過疎の「起点」・中国山地で生じる人口社会増加

中国新聞(2014年1月1日)  
「里山・里海 再評価の流れ」



山陰中央新報(2014年2月11日)  
「離島、山間でも「社会増」」

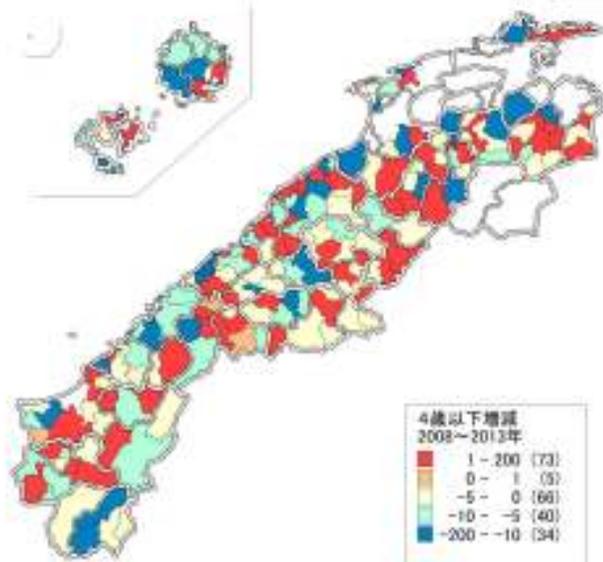


# I 農山村の新しい風－田園回帰－

## ■「田園回帰」の広がり

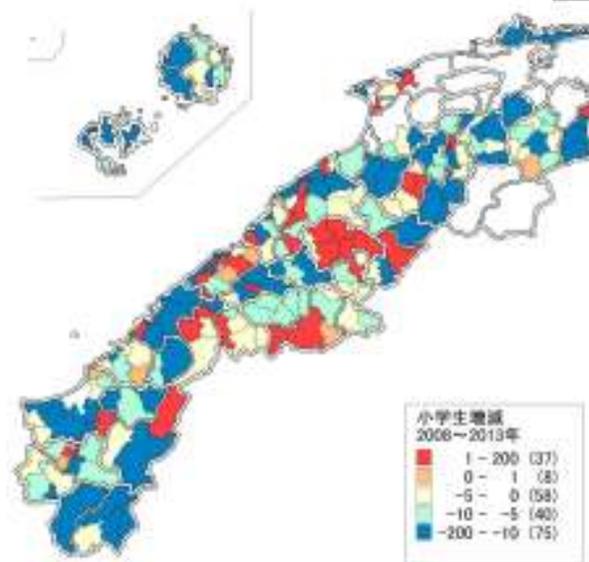
(島根県中山間地域研究センター・藤山浩氏)

(2) 4歳以下の子供増減数



速報暫定版

小学生の増減数



しかし、山間部・離島を中心に、4歳以下の子供を維持・増加している地域が増加(2005～2010年時)には、子供数の維持・増加を果たしているエリアは72エリア)

小学生についても、山間部(特に美郷町)で増えている地域が目立つ

藤山氏作成

→「田舎の田舎」での「田園回帰」(狭義)

# I 農山村の新しい風－田園回帰－

## ■ 移住者の特徴（実態調査より）

- ① 20～30歳代が多い－「団塊の世代」は少ない
- ② 女性割合が上昇；夫婦移住、単身女性、「シングルマザー」－従来は圧倒的に単身男性
- ③ 職業は「半農半X」、「ナリワイ」（多業化）；移住夫婦の標準＝「年間60万円の仕事を5つ集めて暮らす」（ex.NPO職員（農産物流通企画）＋新聞配達＋里山ガイド＋健康体操インストラクター＋飲食店パート＋農業等）
- ④ 「地域おこし協力隊」などの制度を積極的利用
- ⑤ 「Iターン」が「Uターン」を刺激→「孫ターン」も

# I 農山村の新しい風－田園回帰－

■「移住者などごくわずかなもの」  
という批判もあるが・・・

1. 移住者数の実態 (1月3日毎日新聞)

「毎日・明治大学合同調査」  
(2013年度) 全国＝8,169人

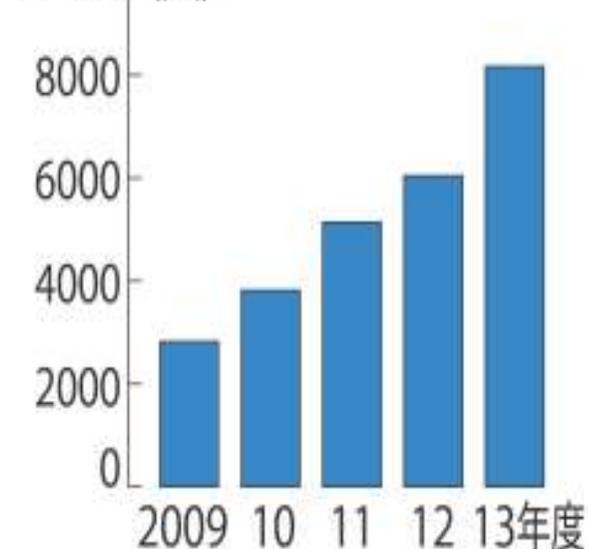
2. 移住者の質的な意味

・「選択住民」の強い発信力

・IターンのUターン刺激効果 (「愛(I)がYou(U)を刺激する」)

3. 量的な意味→(次のスライド)

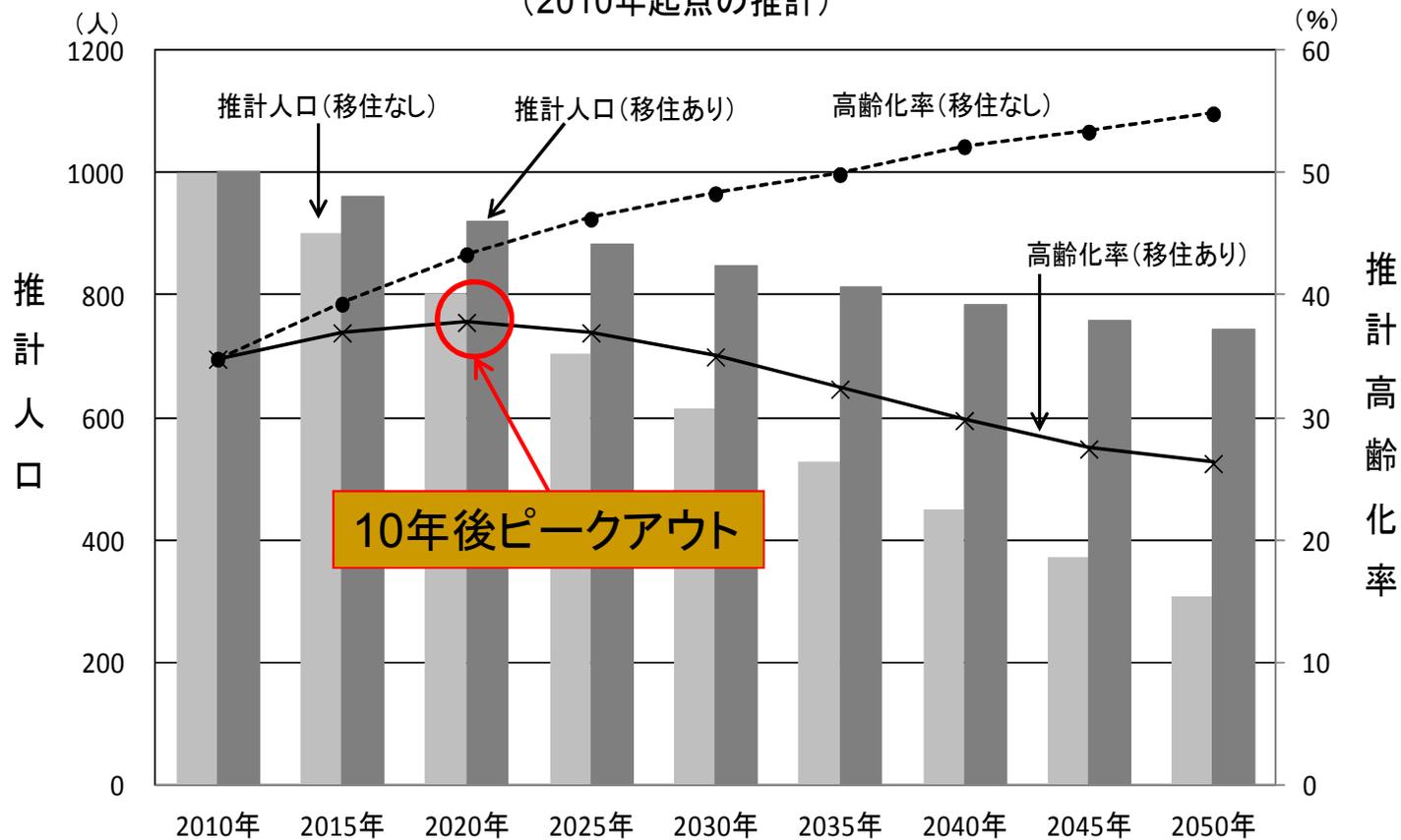
移住者数の推移  
10000 (人)



# I 農山村の新しい風－田園回帰－

## ■ 地域が維持されるための移住者数＝4家族/年

図終－1 山間地域のモデル地区(人口1000人)の将来人口と高齢率  
(2010年起点の推計)



- 注: 1) 資料＝国土交通省「国土のグランドデザイン2050(参考資料)」(2014年)より加工引用。  
2) 「移住なし」は単純なコーホート分析による推計。「移住あり」は、0歳代前半の子連れ家族(子どもは0-4歳代)2組と20歳代前半の夫婦2組の合計4組・10名の移住が毎年あると仮定したうえで、コーホート分析をしたもの。  
3) 推計方法は藤山浩「中山間地域の新たなかたち」(小田切・藤山編著『地域再生のフロンティア』、農文協、2013年)による。

# I 農山村の新しい風－田園回帰－

## ■移住者した若者の意識

①ムラは「温かい」

②ムラの人「かっこいい」

※過疎化のスタート時点とは逆の評価



■いま、地域がすべきこと（「地方消滅」にならないために）  
地域を磨き、人々が輝き、  
そして、若者にも選択される農山村をつくる  
＝「地域づくり」（地方創生）  
の積み重ねが意味を持つ時代へ

## Ⅱ 農山村の実態

### ■空洞化する農山村 = 3つの空洞化

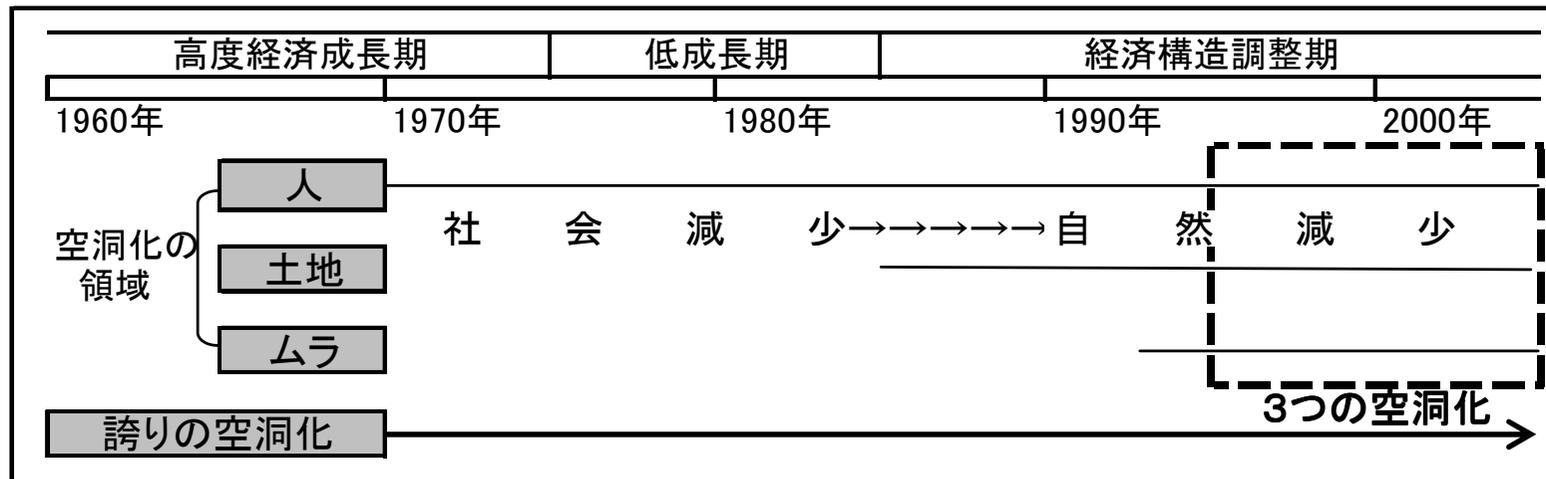
○人の空洞化 → 「過疎」

○土地(利用)の空洞化 → 「中山間地域」

○ムラの空洞化 → 「限界集落」

⇒この延長上に「地方消滅」論は正しいか？

図 中山間地域における空洞化の進展(模式図)



## Ⅱ 農山村の実態

- 小さな「消滅可能性」→強靱な農山村集落：
  - ・その根源は人々の地域に対する愛着

表 過疎地域集落の高齢者率別に消滅可能性  
(2010年調査、構成比)

(単位: %、集落)

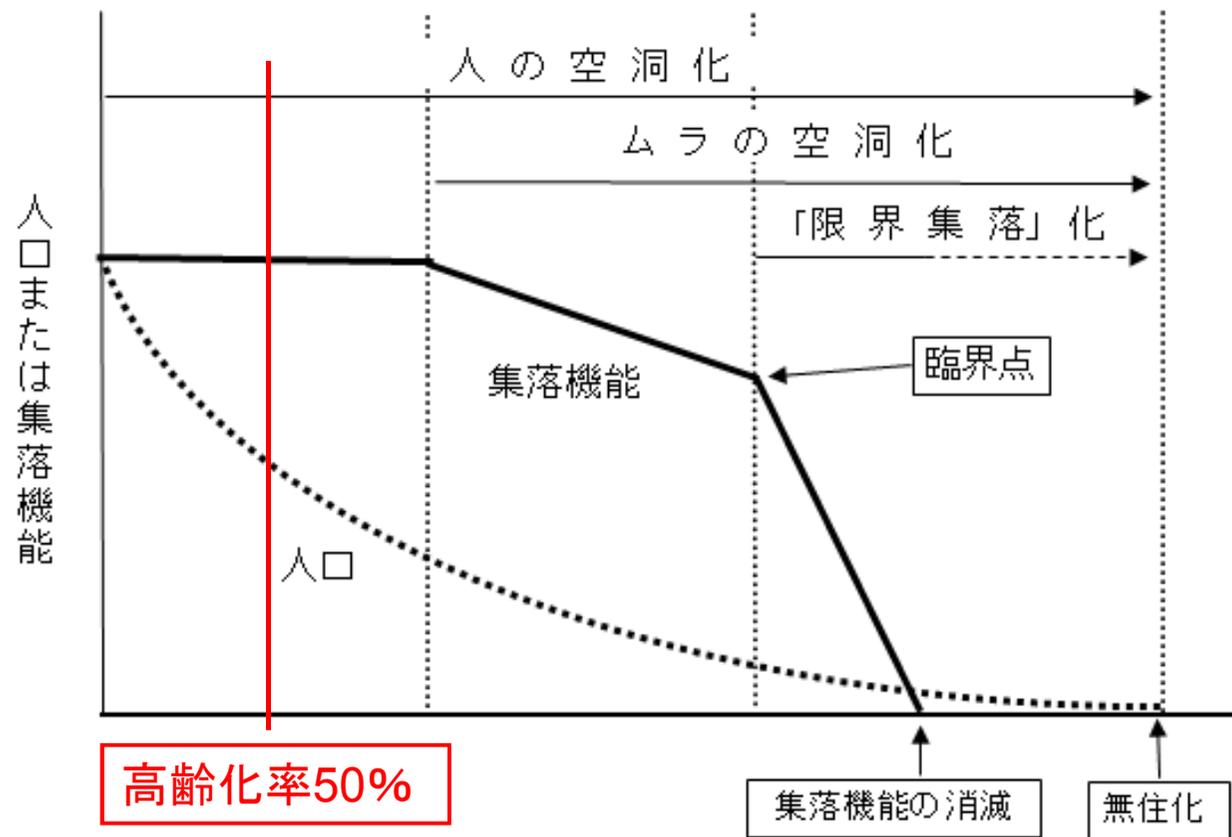
高齢者率での 集落区分	消滅の可能性あり			消滅の可能 性はない	無回答	合計 (実数)
	小計	10年以内	いずれ			
25%未満	2.4	0.5	1.9	85.2	12.4	100 (8,353)
25-50%	1.5	0.1	1.4	86.4	12.2	100 (44,912)
50-75%	12.7	1.4	11.4	74.0	13.3	100 (8,350)
75-100%	37.0	6.9	30.0	54.7	8.3	100 (1,166)
100%	59.0	28.3	30.6	36.0	5.0	100 (575)
(再掲)50%以上	18.2	3.5	14.6	69.6	12.2	100 (10,091)
合計	4.3	0.7	3.6	83.4	12.3	100 (64,954)

注: 1) 総務省過疎対策室『過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査』  
(2011年)より作成。

- 脆弱？ 強靱？ —どちらが現実か？

## Ⅱ 農山村の実態

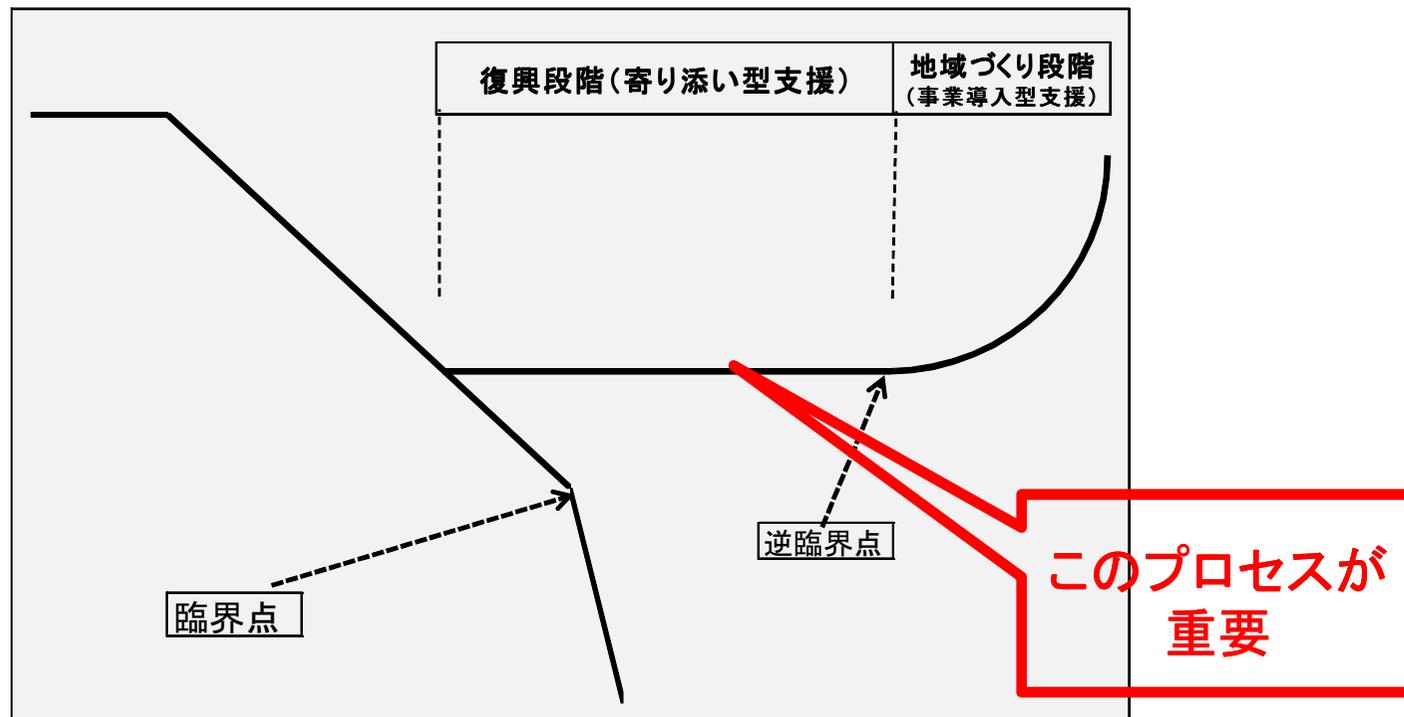
- 農山村の性格: 「強くて、弱い」(矛盾的統合体)  
⇒ その「つばぜりあい」が現在の局面



# Ⅲ 農山村再生戦略－地方創生とは？－

## ■ 地域再生－ふたつの段階（新潟県中越地震復興の経験）

1. 寄り添い型支援段階（足し算のサポート）
2. 地域づくり段階＝事業導入型段階（かけ算のサポート）

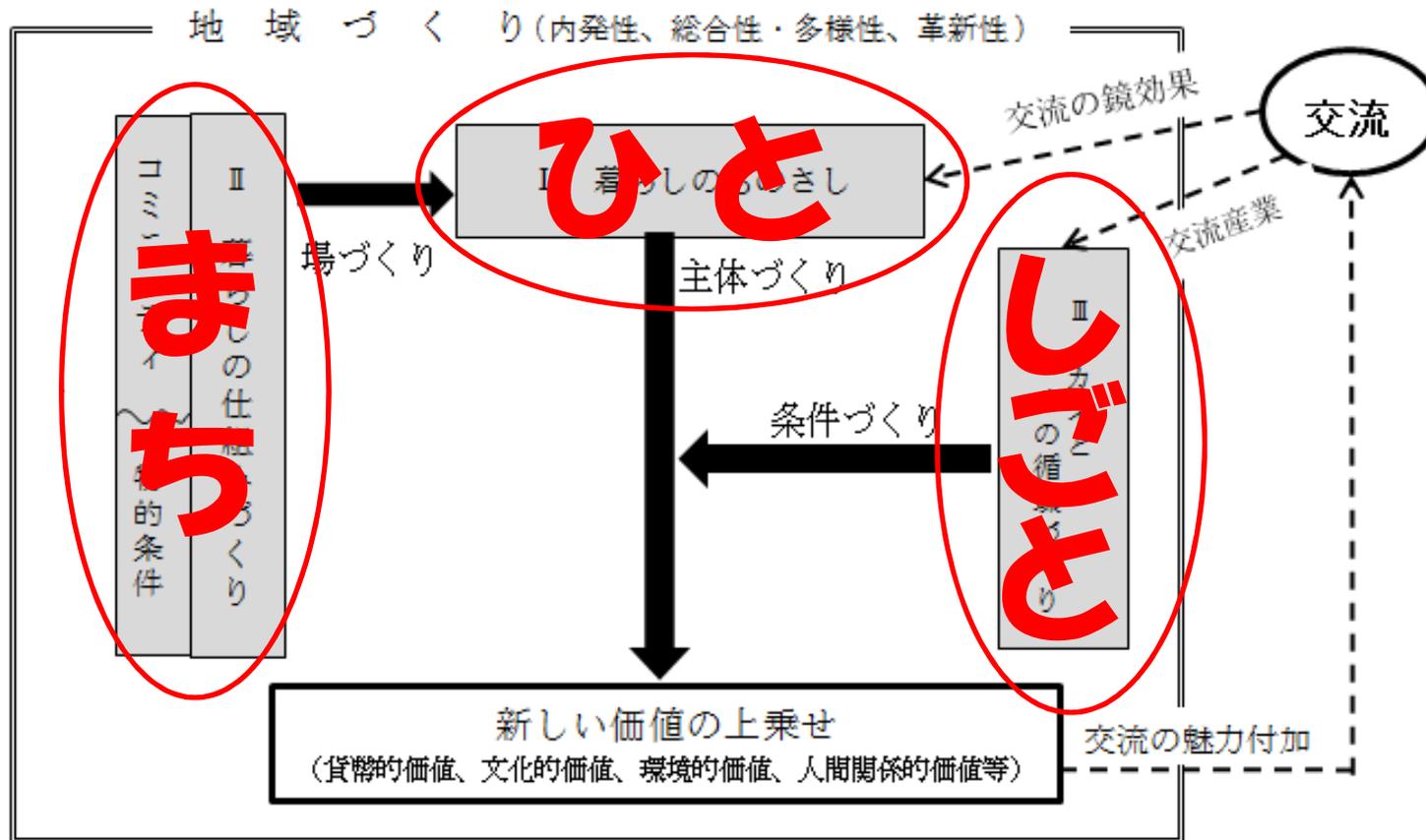


# Ⅲ 農山村再生戦略－地方創生とは？－

## ■ 農山村再生(地方創生)の枠組み＝「地域づくり」

※主体・場・持続条件の3要素の組み立て

図 地域づくりのフレームワーク



## Ⅲ 農山村再生戦略－地方創生とは？－

### ①主体形成（暮らしのもののさしづくり）

- ・ 地域づくりの最重要要素

＝地域に対する**当事者意識**（not危機意識）

← **自らの暮らしをめぐる独自の価値観の再構築**

＝誇りの再生

ex. 地域の歴史・文化・自然（郷土料理、景観・・・）

- ・ その契機

1) **公民館運動**

2) **地域づくりワークショップ（地元学）**

## Ⅲ 農山村再生戦略－地方創生とは？－

### ②場の形成（暮らしの仕組みづくり）

- 1) ソフト＝コミュニティの再生  
集落の位置づけが重要
- 2) ハード＝生活インフラの整備  
医療、教育、生活交通等

### ③持続条件の形成（カネとその循環づくり）

- 1) 公共事業に依存しない地域産業の育成
- 2) 地域内再投資（岡田知弘氏）

## Ⅲ 農山村再生戦略－地方創生とは？－

### ■ 都市農村交流と地域づくり－二つのルート－

- 1) **交流の鏡効果**→「暮らしのもののさしづくり」
  - ・ 都市住民が「鏡」＝農村の「宝」を写し出す  
→農村サイド（ホスト）の再評価
- 2) **交流産業**→「カネとその循環づくり」
  - ・ ホストとゲストの「学び合い」が付加価値  
→高いリピーター率＝成長産業の可能性

### ■ 地域づくりの「交流循環」

- ・ 上記を通じて、「新しい価値」の更なる上乘せ

**※都市農村交流は戦略的活動（都市農村交流庁を！）**

## IV 戦略の具体化

- 農山村で生まれる「攻めるコミュニティ」  
(←→「守るコミュニティ」としての集落・町内会)

- **事例1** 移住者住宅を建築するコミュニティ  
＜広島県三次市青河自治振興会＞

- ・小学校を拠点とする自治組織(公民館機能も兼ねる)
- ・小学校児童数を維持するため**住民出資の住宅会社**((有)ブルーリバー)の設立  
(2002年、9人の出資(一人100万円))
- ・現在10棟(新築7+改修3)  
→39人の移住(2次移住を含め合計61名)
- ・輸送サポート(無償輸送)にも取り組む



## IV 戦略の具体化

### ■ 事例2 スーパーマーケットを作ったコミュニティ ＜島根県雲南市波多コミュニティ協議会＞

- ・15自治会を範囲とする認可地縁団体
- ・地域づくりビジョンを作り、「防災」「買い物」「交通」「産業」「交流」の5分野に重点
- ・地区内唯一の小売店の撤退を受け、拠点の交流センター内に、「店舗」開設
- ・全日本食品(株)と連携し、豊富な品揃え
- ・拠点を活かし、地域自主組織が運営
- ・サロンスペースを作り、利用者には無償の輸送(配達も実施)



## IV 戦略の具体化

### ■ 事例3 若者を雇用するコミュニティ 〈高知県土佐町 石原地区 「いしはらの里」〉

- ・石原地区(旧小学校区) = 4集落で構成
- ・2012年7月に「集落活動センターいしはらの里」を開設
- ・2013年2月にガソリンスタンドをオープン
- ・2013年7月、住民250人が1口1000円を出資して合同会社を設立
- ・2013年11月より、GS敷地内に野菜・総菜等の小売店を開設
- ・合同会社では、大阪府からの移住者など、**若者2名を新たに雇用**



# V 地方創生と大学の役割

## ■大学の二つの「顔」

- ①教員を中心とした大学－専門教育・研究機関
- ②学生を中心とした大学－若者の集う機関

## ■①＝伝統的なく大学－地域連携＞

- ・地域のみでの質的上昇

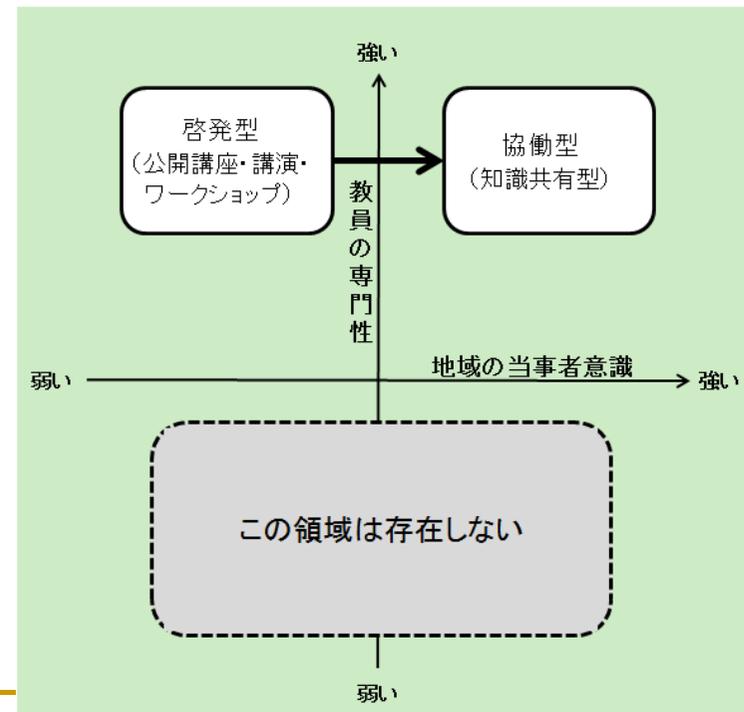
啓発型



協働型

- ・専門機関モデル

※商品開発などの場合



教員中心の地域・大学連携

# V 地方創生と大学の役割

## ■②＝新しい＜地域－大学連携＞

- ・ 双方がともに成長＝若者機関モデル

○交流型



○価値発見型

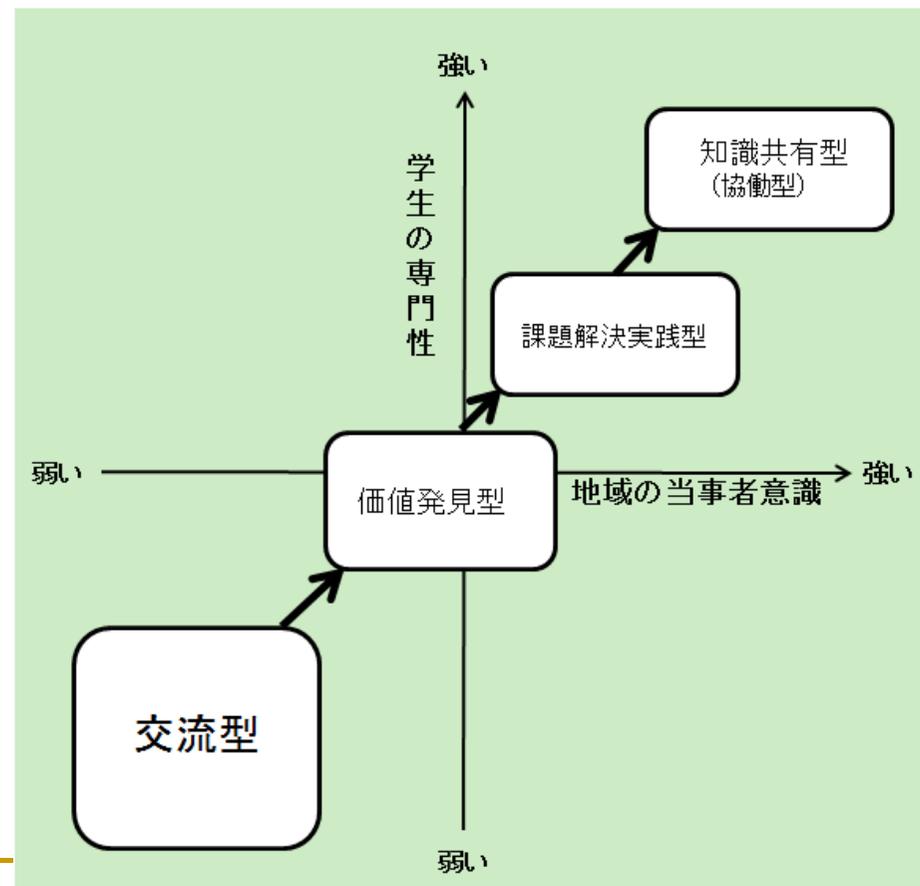


○課題解決実践型



○知識共有型

(名称は中塚雅也等)



# V 地方創生と大学の役割

## ■ 「若者機関モデル」 (新しい連携) の論点

### ① 専門機関モデルとの関係

若者モデル → 専門機関モデル  
(足し算の支援) (掛け算の支援)

### ② 入口の「交流型」の重要性

- ・ 交流型というより「ワイワイガヤガヤ型」
- ・ 大学生にこそできる情報発信

※現在の活動が地域と自分の成長につながると  
いう確信こそ必要

## V 地方創生と大学の役割

### ■ 「若者機関モデル」の課題

○いろいろな段階を一挙に進めることは困難

→課題＝学生が入れ替わる中で、その発展段階にどのように乗っていくのか？

<別の言葉で言えば・・・>

「地域づくりは、焦らず、慌てず、諦めず」

※こうした状況に学生がどのように関わるのか？

## VI おわりに

### ■ 昨年・2014年は？

→ 東京オリンピック、50年

→ 「過疎」(造語)誕生、約50周年

その半世紀後に「地方創生」が始まる

「いままでの50年、

これからの50年」